

○満員電車・車中（朝）

人の頭がぎゅうぎゅう詰めに並んでいる。吊り広告がその混雑を冷ややかに見下ろしている。そこには、喜多野昭二(54)の姿写真。椅子に深く腰かけ、足を組んでいる。「あの衝撃的な長編『川イルカの涙』から半年。今ここに、作家として、人間としての喜多野が大きく暴かれる。初の自伝的エッセイ『アドリブ・ライン』が好評発売中。」

吊革を片手に、ぺちやくちやと喋っていた若い女性二人組のひとりが、吊り広告の方に顔を向ける。

女性A 「ねえ、喜多野昭二のエッセイ出たんだよね。またミリオン確定だって。さて本屋で買うかアマゾンで買うか・・。ね、仕事帰りに本屋寄ってかない？」

女性B 「ワルイ。今日はタケルと、ね」

女性A 「あーそうでしたか。はいはい。女の友情は実にはかない」

女性達の笑い声を背中に西澤正明(54)が背中を丸めながら小さく折りたたんだ新聞を読んでいる。ゆっくり顔を上げ、広告の喜多野昭二を見つめる。電車が停まる。ドアが開く。西澤、はっとして「すみません、降ります」と言いながら人をかき分ける。降りる寸前でドアがピシヤリと閉まる。

○ 雑居ビル外観（朝）

西澤が小走りで古びた雑居ビルの入り口に入っていく。

○ 3階・エレベーターホール（朝）

エレベーターが開く。西澤が細い廊下を突進していく。一番奥の扉に「墨田商事」の看板。

○ 墨田商事・社内（朝）

ドアの開閉音が響き、西澤が入ってくる

る。書き物をしていた桜田明生(52)が顔を上げ、顔をしかめる。

桜田「西澤君、まったく君は……。例のけじめも付かぬまま、今日遅刻とはね」

西澤「申し訳ありません、専務」

西澤、深々と頭を下げる。

桜田「あのゴードチーズがないと困るお客さんは手足の指じゃ足らないよ。家みたいな零細企業はその二十数社で命取りだ。わかってんだろ？とにかく客が満足できる代替え品を早急に何とかしろ。遅刻してる場合じゃないだろ？」

二列目に座っている久保田大地(35)が、心配そうにパソコンから顔を上げ、様子进行をうかがう。

西澤「ニュージラランド産のゴードチーズが今までのオランダ産のものに似ていることは調査済みです。早急にサンプル取り寄せます」

桜田が眉間にしわを寄せながら首を傾

け、手で西澤を制して、だるそうにうんうんうんとうなづく。

○居酒屋・月の輪熊・店内（夜）

西澤と久保田がカウンターに座り、おでんをつつきながらビールを飲んでい
る。

久保田「・・・全部和田部長の判断ミスじゃないすか。なんで西澤課長が責任かぶらないとならないんですか」

西澤「専務と部長とは遠い親戚でね。何か言
ったところであまり事の形勢に違いはない
さ。ならば、主張するよりもできることを
やる。この会社を辞める気がないなら久保
田もだんだんそういう処世術が必要になっ
てくる。辞めるなら早い方がいいと思うよ。
俺はだめだ。情けないと思うだろ？理想な
んか追ってられないんだ。娘と息子の大学
の授業料、いったい年間いくらだと思う？」
久保田「家族のためか・・・。独身の僕にはち

よっと理解しにくいです。いいお父さんな
んですね・課長は」

西澤「よしてくれよ。娘なんか汚い雑巾を見
るような目で俺を見るんだぜ。かみさんは
カルチャースクール三昧。旅行は女友達と。
息子は何考えているのかまったくわからな
い、会話ゼロ」

久保田「そんなあく。それじゃあ課長の居場
所はいつたいたいどこにあるんですかあ？なん
か悲しくなってきたなあ。余計結婚したく
なくなりましたよ。課長のせいだ」

西澤「お前が結婚できないの、俺のせいにな
るなよ。(笑) 現実には厳しいさ。・あ、そ
うだお前にだけ言っちゃおうかな。どうし
ようかな・・・」

久保田「なにもつたいぶってるんですか。ど
うせスナックの加奈ちゃんと、メアド交換
したとかそんなんでしょ」

西澤「ばっかやろう。スケールばかでない
だ。聞いて驚くな。俺はな、あの喜多野昭

二と友達なんだ。高校時代のな」

久保田「喜多野昭二いいいい？あの大家作家？冗談も休み休み言って下さいよ、課長」

西澤「別に信じないならそれでいいよ。ヤツが作家になってから会ってないしさ、関係ないよ。この話終わり！」

久保田「はあく。信じがたいことが実際あるもんなんです。僕、今まで出たものほとんど読んでると思う。え、連絡とかとればいいじゃないですか」

西澤「しがないサラリーマンの俺があの大先生に？砂粒のような俺のプライドがしくしく痛むよ。向こうだって今更迷惑だろ」

久保田「いやそんなことないと思うなあ。有名な人ってのは結構寂しいもんらしいですよ」

西澤「実に複雑なんだよ、俺の脳内が。喜多野をバリバリ誇らしく思う気持ちと、自分が見じめでかわいそうに思えてしまう情けない気持ちとの狭間でさ。」

久保田「・・・」

西澤「でも、彼の書くものは純粹に好きでね。

昔のアイツが所々に散りばめられているのが俺にはわかる。それを読んで俺、恥ずかしながら泣いている時があるんだ・・・」

西澤、グラスに残っているビールを飲み干す。

○都高校3年c組教室（回想）

弁当を食べている西澤(17)のところに

喜多野(17)がやってくる。弁当箱には少量のごはんとから揚げがひとつ残っている。そのから揚げをひよいと摘み上げ食べる喜多野。

西澤「お前！それはないだろ。最後の楽しみに取っておいたのに。ショックで午後の授業集中できない」

喜多野「お前の母ちゃんのから揚げうまいんだもん。な、午後授業ふけてレコード屋行かない？どうせ集中できないんだろ？」

西澤「んだな。じゃパイドパイパーに行こう。」

お前さ、将来ジャズバー開きたいって言うてたじゃん。なのに大学行くの？進路希望見えちゃったんだけどさ。」

喜多野「とりあえず育ててもらってるんだし、親の希望も聴こうかなと。でもサラリーマンにはならない。絶対無理だと思う。ホームレスになっても自由に生きていくと思う」

西澤「俺はそっちの方が無理だわ。いくら自由でもそれは怖い。だから俺はたぶんサラリーマンになると思う」

喜多野「そおかあ。そういう感じ方もあるのか。。。自由を求める怖さ。ね。。」

○ 西澤家・門前（夜中）

西澤が千鳥足で歩いている。「西澤」の表札がかかった門前でポケットを探り、鍵を取り出す。玄関へと消えてゆく西澤の後ろ姿。

○ 西澤家・居間（夜中）

西澤卓也(20) がソファーに寝ころびながら本を読んでいる。その本の背表紙に、喜多野昭二の写真が印刷されている。玄関の扉が開く音、乱れた足音、壁にぶつかり「いてっ」と言ってる西澤の声が聞こえる。西澤が居間のドアを開けて入ってくる。

西澤 「おっ、びっくりした。卓也まだ起きてたのか。母さんは？」

卓也 「寝てるよ。何時だと思ってるの？もう一時半だよ」

西澤 「あれ？おまえそれ喜多野昭二の新刊だろ？今度はエッセイだったな。おもしろいか？」

卓也 「るせえな。おやじには関係ない」

西澤 「はっはっはっはっ。それがねえ卓也君、申し訳ないけどすごく関係あるんだよねえ」

卓也 「酔っ払いの相手はごめんだね」

西澤 「まあそうさな、酔っばらってるから言えるんだね、これが・・あのね、喜多野昭

二は俺の高校時代の親友だった！」

卓也「はっ！？」

西澤「ちよつとしたやつかみで黙ってたんだ」

卓也「えゝ、冗談じゃなく？ それ、ほんと

ならすごい！ な、おやじも読んだ？ 俺さ、

『金芳堂の大猿』が一番好きなんだけど」

西澤「や！俺もそうだよ。これってやつぱり

親子ってことなのか」

卓也と西澤が夢中になって話している。

○ 西澤家・書斎（早朝）

西澤がパソコンに向かっている。

西澤の書いたメールの内容「・・・覚えていてくれているだろうか？高校時代のクラスメートの西澤正明です。喜多野が有名になり過ぎて、自分との間に大きな壁を感じてしまい、結果不義理をしてきたと思っています。ところで、夕べ、ずっと接点のなかった息子と奇跡的に熱い会話を楽しんだんだ。それはお前の本をきっかけにだ。そのこと

にとても感謝している。ただそれを伝えた
かったただけだ。これからもお前の活躍を心
から祈っている」

○ 西澤家・リビング（夜）

卓也がカップラーメンをすすりながら
テレビをみている。テレビ画面には喜
多野昭二がインタビューを受けている。

アナウンサー「・・・喜多野さんが作家として
嬉しいと思えるときはどういう時ですか？」

喜多野「読者との関係性が実感出来るときで
す。特に最近で嬉しかったのは、昔の友達
が、自分の息子と僕の本のことで話題が弾
んだ、感謝してる・・・というメールをもら
ったことです」

卓也、箸をとめてテレビを見入ってい
る。キッチンの方に振り返る。

卓也「ねえ、お父さん、今日も遅いの？」